

---

# 闇仕事

服部航海

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇仕事

### 【Nコード】

N9711C

### 【作者名】

服部航海

### 【あらすじ】

隆司が求めているもの。それは快感と金。そんなことばかりを欲していた時、久しぶりに再会した親友から闇の仕事（闇事）の話しを聞く。

第1話・再会と始まり（前書き）

はじめての投稿です。よろしくお願いします。

## 第1話：再会と始まり

隆司はコンビニのバイトを終えて家へと向かって歩いてた。  
隆司の唯一の収入源がバイトと親の仕送り。

そう、いわゆるフリーターだ。

趣味もなく、何にも興味がわかない、ダラダラと過ごしてきた隆司が今求めているのは爽快感。快感。そして金。楽しんで手に入る方法ないかなあ。

そんなことを考えていると自分の住む小さな貸家が見えてきた。家の玄関でカギを探していると急にポケットに入っていた携帯が震え出した。

携帯を取り出し見ると「阿部卓哉」と表示してある。

卓哉とは高校で知り合ってオレみたいになんでもめんどくさがついてなんでか気が合って一緒にいた。

しかし高校を卒業してから卓哉は自分の父親の店を継いだらしい。

はじめは何度か電話したりしていたが

「オレ忙しいから」と電話をしなくなってもう5年ほどたっていた。

あまりに急で一緒ためらったが電話にでた。

「あつ、もしもし隆司？オレ、卓哉だけど」

「お：おう。久しぶりだな。どうしたの？いきなりお前から電話してくるなんて」

「仕事が休みなんだ。それで隆司の事思いだしてさあ。今ひま？久しぶりだし会えないかなあと思って」

「いいぜ」

隆司はバイトが終わると何もすることがなかったので即答した。卓哉とは6時に隆司の家の近くの昔、高校の帰りにほとんど毎

日卓哉と寄っていたファミレスで会うことを決め電話を切った。

隆司は卓哉と会った時、あまりに変わったいたので驚いた。

昔はめんどくさいと寝癖あつたりダラダラとした話し方が印象的だったのが今では髪をしっかりと整え、はきはきとしゃべっている。

「隆司は全然昔と変わんないよなあ」

「お前は変わりすぎだ」

「そうか？そんなことより隆司令、何やってんの？」

その話しになると隆司は黙り込むしかなかった。フリーターなど自慢できるものではない。

「どうした？」

「……今は仕事辞めてバイトで生活してる」　しばらく沈黙が続いた。

すると卓哉が沈黙を破るように言った。

「……まあなんだ。いろいろあるよな」

「……………うん」

すると卓哉はなにかを思い出したように隆司を見た。

「あつ！そうだ。そういえばな、この前うちの店のバイトしてるやつがおかしなこと言ってたんだけどよお」

「なんだ？」

「それがさあ……………」

隆司は大きな住宅街の中にある小さなアパートの一室の扉の前に立って昨日の卓哉の話しを思い出していた。

「それがさあ、実は一つの仕事で大金が手に入る所があるらしいん

だよ」

「大金？」

「ああ。でもその仕事が半端な覚悟でやるとダメらしいんだ」

「…その仕事って」

大金という言葉に反応してしまった。

「わからん。それは自分で見てくださって言われたんだ」

「へえ〜。そうなんだ」

隆司は興味がなさそうな顔して聞いていたが心の中では興味津々だった。

「あれ？興味なかったか？」

「いやいや全然！それで」

「ああ。仕事とか詳しいことはわからないけどその仕事を紹介してくれ場所は知ってるぜ。場所は…」

そう言って来た場所がこのアパートだった。

「ここはどこにあるんだよ」といいながらも試しに扉を叩いてみた。

しばらくすると、扉が開いた。奥から40代ほどの作業着をきた男が現れた。

男は隆司を見てから

「どちらさん？」

と言った。

隆司は卓哉の話しを思い出す。

「誰かがでてきたら『闇事をしたい』って言えばいいらしいんだって」

隆司は聞いたとおりに冗談半分で言ってみた。

「闇事をしたい」

すると男は当たり前のように自分の部屋に招き入れた。

隆司はまさかと思いながら部屋に足を踏み入れた。

部屋は中年の男が住むようなごく普通の部屋だった。

ここが？つとア然としてみると、男は部屋の真ん中に雑に敷いてある汚い布団をどかし畳みを持ち上げた。

隆司は畳みの下を覗くとそこには深く深く続く階段が続いていた。

隆司は驚いき男を見ると

「いらっしやい。闇事へようこそ」

それだけ言い隆司を階段に招いた。

第2話・初仕事（前書き）

小説って書くの難しいですね

## 第2話：初仕事

階段を降り続けること5分。

ようやく一つの扉が闇の中から現れた。

この先に何があるのだろうか？

不安と恐怖もあったが好奇心の方が強かった。

ドアノブに手を置き深呼吸してからゆっくりとドアを開いた。

扉の向こうは小さなバーのようになっていた。

テーブルが二つとカウンターにも座れるようにイスが何個か並んでいる。

人はいない。

しばらく黙ってあたりを見ていると部屋の奥にある扉から人が現れた。

「いらっしやい」

でできた男は黒のスーツをきたロン毛の男だった。

男はカウンターに立つと隆司に言った。

「あなた、初めての人だね？ここにきたってことは少しはわかってんだよね」

隆司は頷いた。

「ここは表ではない、裏の仕事をお客に提供している闇仕事案内所。

略して『闇事』って呼んでんだ。今ある仕事は…」

男はカウンターの下から本のようなものを取り出し置いた。

隆司は近づき本を見た。

表紙には闇事と書いてある。

隆司は本を開いた。

1ページ目。

『人殺し』と書いてある。

次のページ。

そこには写真、理由、実行期間、金額などが詳しく書かれていた。

パラパラとページをめくる。

隆司はこんなに殺してほしい人がいるのかと驚いた。

「この中からやりたい仕事をするだけでいい。やりたいのはありますか？」

男の問いに隆司は迷った。

本当にできるのか？ 恐い。しかし求めているものが手に入る気がする…

隆司はページを開き男を見た。

「これをしてほしい」

男はそのページを見て言った。

「かしこまりました」

隆司が選んだのは夫を殺してほしいという女性の依頼だった。理由は、結婚してから奴隷のように扱われ、暴力も毎日のように続いているとのことだった。

金は一千万。

場所は隆司の住む街のとなり街であるという近場であるのが隆司の選んだ理由だった。

男が隆司に説明する。

「ターゲットは三日後に愛人と会うのでその日に実行してください。仕事を終えたらこの携帯で連絡してください」

そう言っつて男は携帯と電話番号の書いた紙を渡した。

「どうやって殺すんですか？」

隆司が質問すると男はカウンターの下から銃を取り出し隆司に渡した。

隆司は弾の入った本物の武器を持ち実感した。

これは現実なんだと。

三日後

バイトは休み。今日は実行の日。隆司は家でテレビを見ていた。

しかしいつも笑えるはずのお笑い番組も集中できない。  
時計を見る。午後九時。  
隆司は準備を始めた。

ポケットに電話番号の書かれた紙と携帯を入れた。そして机の引きだしを開けた。  
中には銃が置いてある。  
隆司はそれをつかみバックにいれた。  
ターゲットはとなり街。  
隆司は部屋を出た。

一時間後

隆司は大きな公園のしげみに身をひそめていた。  
夜の公園に人はいない。

時計を見る。10時。

「そろそろだ…」

すると一人のメガネの男が現れた。  
その男がベンチに座った。

「あいつだ！」

隆司はバックから銃を取り出した。

心臓が高鳴り出し汗が尋常じゃないほど体からでてくる。

ここにきてわかった。

自分は取り返しのつかないことをしようとしているのだと…  
しかし欲望は押さえられない。

隆司は決心し、しげみから飛びだしターゲットに近づいた。

隆司は男の前に立ち黙って見ていた。

男は隆司を見て立ち上がり言った。

「なんだ。てめえ！」

「……………」

隆司は無言で右手に持っている銃をゆっくりと男にむけた。

「おい！おもちゃなんか向けたって怖くねんだよ！」

隆司はニヤリと笑った。

「お……………」

思いきり引き金を引いた。公園に銃声が鳴り響いた…………

「……………はい。今終わりました。これからどうすればいいですか？……………  
……………わかりました。明日また……………」

電話を切った。

隆司は男を見下ろす。

ひたいに穴があき眼を見開いている。

後頭部からは血がでていて地面を真っ赤に染めていく。

隆司は黙っていられず走りだした。

人を殺すことなど簡単だ。罪悪感、後悔はない。引き金を引いたとき実感した。

キモチイイ

これが今まで求め続けていた快感だと。

隆司は込み上げてくる満たされた感情を抑え切れず狂ったように走り続け笑いが止まらなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9711c/>

---

闇仕事

2010年12月29日02時27分発行